



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(14)

中村周平

前回、修士論文における考察から、今後取り組んでいきたい事柄について、記述しました。また、修士論文の作成の過程において、もう一度、かつての指導者の方々と向き合うことの必要性を感

じ、行動に移すことができた経緯についても触れました。今回も引き続き、指導者の方々との関わりなどに触れつつ、最後に自分自身と修士論文の関係性について記述させていただきたいと思い

ます。

年が開けた1月上旬、母校の京都成章高校で話をさせていただく日を迎えました。行きの車中で、何度も話す内容を繰り返していました。「最後までやり通せるだろうか」、不安でたまりませんでした。

1月9日、母校である京都成章高校で、現役の選手と、その保護者の方を対象に、話をさせて頂くことができました。毎日のように楯円球を追いかけている「現役の選手」に話をさせていただくことは、調停後、私が切望してきたことでした。練習後、高校の図書館に集まっていただき、1時間ほど話をさせていただきました。ラグビーとの出会い、ラグビーと勉強との両立に悩んだ高校生生活、突然の事故によって変わってしまった日常、「スポーツ事故は決して『特別』なことではない」ということを、聞いてもらっている現役の選手たち、そして彼を日々見守っている保護者の方に知ってもらいたいという想いを乗せて。

しかし、今回、話をさせていただく上で大きな不安を抱えていました。以前、ある大学のラグビー部に同じように話をさせていただいた時のことです。当時の私は、事故の原因究明を打ち切った学校やラグビー部への憤りや、事故に対する「被害者的感情」にしばられたままでした。話す内容も、「私の事故は十分な原因究明がなされていない」「スポーツ事故の『被害者』は泣き寝入りしなければならない現状がある」など、「被害者」としての主張が大きな割合を占めていました。今考えると、私が自分の事故と正面から向き合えていなかった...いや、そのような形でしか向き合えなかったのだと思います。事実、話を終えた後のラグビー部キャプテンのコメントは、「自分たちはラグビーができていることを幸せに思わなければならない」というものでした。私が伝えなかった「少しでも事故を減らしたい」という

想いとは全く違うものだったのです。当時は、なぜそうなってしまったのか全く検討が付きませんでした。しかし、それは決してラグビー部のキャプテンが間違っただけの理解をしたのではなく、私の情報発信の方法がそのような思いを抱かせたのだと考えます。学校やラグビー部に対して反省を求める「被害者」の立場でおこなった私の話、それを聞いた彼らには、「不運にも事故に遭ったかわいそうな人」として映っていたのではないのでしょうか。

今回はそうなることを避けるため、「事故の被害者」ではなく、「ラグビーが好きな元ラグーマン」であることを心がけました。そして、「今日の話でラグビーに対して恐怖感を持ってしまうことは一番望まないこと。ただ、スポーツにはリスクが伴うということを再認識してほしい。スポーツ事故が『特別』でないからこそ、『安全』について一緒に考えていってほしい。今日の話、成章高校ラグビー部みんなが『安全』について考えるきっかけになれば」ということを訴えました。

話を終えたときの選手や保護者の方からの反応は、「困惑」の色を隠せないものであったと感じています。「今」をスポーツに賭けている人たちに、スポーツ事故のことを伝え、理解してもらうには、私が取り組んでいかなければならない課題が多く存在していると思います。しかし、3年前の大学で話したときとは違う気持ちで臨んだ私の想いは、ラグビー部の指導陣の方々には伝わったと感じています。今回、母校である京都成章高校で話をさせていただいたことを、双方の関係を修復していくことへの新たなスタートとしていきたいと考えます。事故後に生じたラグビー部の指導陣との温度差によって、少しの思いの行き違いが「わだかまり」や「不信感」につながるようになりました。学校側との補償についての話し合いも折り合いがつかず、結果的に誰も望まなかった「司法の場」に全てを委ねることになってし

まったのです。そして、「司法の場」に委ねたことで、「加害・被害」の関係が浮き彫りになり、お互いが歩み寄るどころか、話し合いを持つきっかけさえ掴めないまま8年という歳月が過ぎていきました。しかし、修士論文のテーマとして向き合っていくなかで、「被害者の感情」のしがらみがあった自分の心境をあらためて見つめ直すことができました。相手に反省を求めていく姿勢ではなく、お互いの経験を共有したいという思いを持って、監督やコーチとの話し合いを重ねるところまで、漕ぎ着けることができたのです。そこには、以前のような「加害・被害」の関係は存在していなかったと感じています。今後も、時間を掛けながらラグビー部の指導陣との関係を修復し「事故に遭った中村周平」ではなく、「京都成章高校ラグビー部 OB の中村周平」として関わっていければと思います。そして、この修士論文に書き出した視点や取り組み、スポーツ事故における処理を「司法の場」でやりとりされてしまうことを未然に防ぐ仕組みなど、今後、理論化に向けて動き出し「加害(禍害)と被害を越えた」論理の構築を考えていきたいと思っています。

そして、「学校」におけるスポーツ事故への取り組みとして、事故に遭った本人や家族とラグビー部の指導陣や学校、相互のこれまでの経験を共有した後に考えられる「具体的な取り組み」について考えていきたいと思っています。日本ラグビーフットボール協会調べによる、年間平均 20 件もの重症事故が起きているという現実。安全な練習場の確保や科学的なトレーニングを用いて、事故を少しでも減らしていく取り組みをおこなっていくのと同時に、改めて「スポーツには事故という一定のリスクが存在する」ということを認識する必要があると考えます。スポーツにおける「事故」「危険」について正面から向き合うことは、スポーツに関わる人の中でも、できることなら避けて通りたいと考える人も少なくないでしょう。何事も無く終わってくれることが一番の願いで

あると思います。しかし、だからといって、事故が起きているという現実にはフィルターをかけてしまい、「事故撲滅」を掲げ、重症事故の再発防止に取り組むだけでは、本当に事故を減らすことにつながっていかないのではないのでしょうか。「スポーツには事故という一定のリスクが存在する」という現実と向き合い、そのことを踏まえ「学校」におけるスポーツ事故に対して取り組んでいかなければなりません。その「具体的な」取り組みとして、「学校」におけるスポーツ事故のための「防災訓練」が考えられないかと思っています。考察の部分で触れたように、スポーツ事故における「重症事故」に直面した経験を持つ指導者は少なく(重症事故が少ないことに越したことはないのですが)、事故直後に「適切な対応」が取れない現状があります。そのことから、スポーツ事故の対応に慣れている人はいないという前提に立ち、仮に「学校」におけるスポーツ活動中に事故が起きた際の「適切な対応」を経験してもらい「防災訓練」の必要性を感じます。「学校」におけるスポーツ活動中のリスクに対応できるノウハウ、スキルを持った人間を一人でも増やしていくことで、直接事故を減らすことはできないとしても、事故対応での「最悪の状況」を回避することにつながっていくのではないのでしょうか。また、ラグビーや柔道など、特に危険を伴うスポーツに限定するのではなく、学校スポーツ全体で、この「防災訓練」をおこなっていくことで、学校スポーツにおける安全についてのボトムアップが考えられます。さらに、熱中症や脳震盪といった「専門的な」処置についての知識の向上や情報の普及、重症事故が起きた際の主な搬送先となる医療機関の確認、連携など、様々な変化も期待できるのではないのでしょうか。そして、何より学校スポーツに関わる指導者やコーチだけでなく、実際に日々スポーツをおこなっている中高生たちにも、あらためて「スポーツの安全」について考える機会を持ってもらうことにつながると感じ

ています。

ただ、この「防災訓練」が裁判や調停といった「司法の場」において、学校側にとって優位に働くものとして扱われることを私は決して望みません。これは「このような取り組みをし、適切な対応をしているから事故における過失はない」と学校側の「証拠」に使われるのではなく、学校スポーツに関わる人たちに「スポーツには事故という一定のリスクが存在する」ということを改めて認識していただき、その経験を通して学校スポーツにおける「安全」について考えてもらう「きっかけ」のためのものだとすることを強調しておきたいと考えます。

まだ多くの検討が必要ではありますが、この「学校」におけるスポーツ事故のための「防災訓練」をプログラム化し、学校スポーツに関わる全ての人たちへの普及を考えていきたいと思えます。「学校」におけるスポーツ事故への対応を、その現場に直面する可能性を持つ方々と共に考えていくことで、より現場に即した学校スポーツにおける「防災訓練」の仕組み、そして、それを通してあらたな「安全」のあり方を構築していけると考えます。

おわりに

私にとって修士論文は、「応用人間科学研究科での修士論文」というだけでなく、私の人生を大きく変えてしまった事故と向き合い、「2002年11月17」に止まってしまった時間を動かしていくためのものでもありました。大学院で研究を進めたいと思っていたテーマは、卒業研究でもおこなっていた「障害学生支援」でした。私が大学でもっとも時間を費やした研究であり、日々支援を受けながら大学生活を送っていた当事者でもあったことから、私の中で数少ない研究を深めていけるものでした。また同時に、この「スポーツ事故」を取り上げたいという思いもありました。しかし、その当時はまだ調停がおこなわれており、一向に

終わりが見えないことに大きな不安を感じていました。卒業研究として深めるには抵抗があったのです。調停が終わっても、かかった時間の長さ、失ったものの大きさから「これ以上『スポーツ事故』について触れたくない、これ以上周りの人からいろいろ思われるようなことはしたくない」という思いがありました。誰かに恨まれるかもしれないという不安を抱きながら書かなければならないテーマよりも、ある程度の経験や裏付けもあり、何より批判されることの少ないテーマを無意識のうちに選んでいたのかもしれませんが。

このような背景を振り返ったとき、この「スポーツ事故」をテーマに修士論文を進められたことは、私にとって非常に意味のあるものであったと感じています。「スポーツ事故に加害者はいない」と訴えながらも、自分の事故を文中で「悲劇」と表現していたこと。「被害者感情」のしがらみによって相手に反省を求める情報発信をしてしまったことで、ラグビー部の指導陣や学校を蚊帳の外に追いやってしまったこと。事故と正面から向き合うことで様々なことに気付くことができました。そして、論文を書き進めながら、現実にはラグビー部の指導陣との関係を修復するために自ら行動を起こすことができました。そのことは、私のこれからの人生にとって何ものにも代えがたいものであると考えます。また、終章の冒頭でも触れたことでもありますが、このテーマをやり切ることの原動力ともなったのが、「元ラグーマンである自分」でした。事故後しばらくは、ラグビーについて考えることや試合を観ることに大きな抵抗がありました。事故直後に至っては「ラグビー」という言葉を聞くことさえ苦痛であったことを憶えています。しかし、今でもラグビーが好きな「元ラグーマンである自分」を、本論を通して改めて感じることができました。中学でラグビーと出会い、そこでしか味わえない「おもしろさ」に惹き込まれていきました。また、ラグビーを通じてできた仲間の存在は私にとってかけが

えないものです。ラグビーと出会うことがなければ、今の「中村周平」はいなかったと思います。ラグビーで重症事故が起き続けている事実を見過ごすことができなかつたのは、障害を負ってもなお、「元ラグーマンである自分」を持ち続けていたからです。そして、修士論文をきっかけとし、スポーツによって私の青年期に形成された、「アスリートパーソナリティ」についても興味を持ちました。今後も自身のペースではありますが、この分野についても深めていきたいと考えています。

また、一度はテーマとして考えていた「障害学生支援」も、今回の「スポーツ事故」の研究と決して無関係ではなかつたということを感じています。それは、この「研究」を深めていくことができたことに「障害学生支援」が大きく関わっていたことです。学部時代の講義中の支援、院に進学してからは参考文献のPDF化、クラスターでの発表資料の印刷、インタビューの文字おこしなど、ここ立命館大学大学院応用人間科学研究科の院生として、大学の「障害学生支援室」の方々に大変助けていただきました。また、何度も研究の相談に乗ってくださった担当教員の方々や、毎回のクラスターで手を貸してくれた家族クラスターの友人、いつも意見を出してくれた学部の後輩の存在など、多くの方々に支えていただき、「研究」を進めていくことができました。私にとって非常に重いテーマと向き合い、考え方や視点を変えていくことができたのも、私一人ではできないことに力を貸していただけたことによってエンパワーメントを引き出していただけたからと考えます。私が歩んできた「障害学生」としての6年間は、私を様々な意味で成長させてくれた貴重な時間でした。ここで学んだ考えや経験を、これからも大切に、多方面でも活かしていきたいと思っています。

自分一人では事故に向き合うことも、論文を書き進めることもできませんでした。日々のクラス

ターやオフィスアワーで、熱心に指導して下さった家族機能・社会臨床クラスターの先生方、自身の心境を詳細に書き出すため、何度も「私へのインタビュー」に協力して下さった院生の北村真也さん、私が安心して講義を受けられるよう日々のクラスターで支援して下さった家族機能・社会臨床クラスターの皆様には心から感謝しております。また、論文中には活用できなかったのですが、論文作成のためインタビューに協力して下さった方々にも御礼申し上げたいと思います。

この修士論文は未来完了形であると思っています。今後もラグビー部の指導陣との話し合いを続け、今でもラグビーを愛する元ラグーマンとして、京都成章高校ラグビー部の一員として関係を築いていきたいと考えます。そして修士論文での、スポーツ事故における取り組みを現実に実践していくことで、少しでもスポーツにおける事故を減らしていくことにつながればと願っています。